

「母」になることのないストーリー・テラー

— *Their Eyes Were Watching God* についての考察 —

志 水 智 子

Abstract

In Zora Neale Hurston's *Their Eyes Were Watching God* (1937), the heroine, Janie, never becomes a mother after marrying different men three times. It is unnatural that she and her husbands never talk about having children. Hurston wrote this novel while she was staying in Haiti to research "voodoo" ceremonies. Erzulie Freda, a goddess in "voodoo," has many husbands, but doesn't have any children. It can be considered that Erzulie corresponds to Janie.

This essay investigates why Janie does not become a mother and what messages Hurston sends in this setting. Firstly, without her children, Janie must resolve the discriminating issues, which her grandmother suffered from, in her generation and has a legal spouse as her grandmother wants her to do. Janie must resolve the issue by herself and must not pass it to the later generation. Secondly, the roles of the male spouses are emphasized if Janie remains childless. She can love and believe others positively even though she sometimes feels disillusion. Thirdly, Janie is described as an individual person without a mother-child context. Janie must be alone showing the dignity of individual solitude unlike her grandmother.

Janie is independent of blood relationships, ethnicity and the bonds between a man and a woman. She is the only interpreter of her life in the sense that she does not have later generations. She is a creator of a "closed" story of herself and tells her life without the help of another generation.

序

Zora Neale Hurston (1891-1960) の *Their Eyes Were Watching God* (1937) は、Hurston が文化人類学研究の一端としてヴードゥーの儀式について取材するためにハイチに滞在中に執筆された著作物の一つであり、それゆえにヴードゥーの神々の特徴が作中の人物像にデフォルメされているという先行研究も存在する。たとえばヴードゥーの女神である Erzulie Freda は、愛をつかさどり、多数の夫を持つが子供は持たない。さらに彼女は若く美しい女性の姿をしており、ムラート（白人と黒人の混血）である。これらの特徴はこの作品の主人公である Janie と重なる¹。この女神との共通点によって、Janie はその夫たちに勝るたくましさや強い愛を求める気持ちを持っていることが示唆される。しかし Janie はあくまでも限られた視野と能力を持つ人間として、時間と経験を重ねながら生きる力を身に付けていく。Janie は三度結婚し、そのたびに自分の視野を広げていくのだが²、若くして結婚する彼女が一度も妊娠や出産を経験することがないこと、夫たちがそのことについて言及する場面も全く描かれないことは、いささか不自然な点である。そこで本稿では、Janie が「母」にならないことの意義と、それに込められた Hurston のメッセージについて考察していく。

結論から述べると、彼女が「母」にならないことの意義は、次の三つの点において概説できる。第一の意義は、Janie が彼女の代で解決すべき課題の体現者であり、「閉じられた」ストーリーの創出者であることが示唆されることである。Janie の人種観には多分に Hurston の意識が映し出されていると考えられる。アメリカ社会における弱者としてではなく、人種という色眼鏡を通してでもなく、自分の生き方を主張し、それを尊重できる一人の女性となることで、Janie は彼女の世代において祖母から受け継がれた課題を解決しているのである。第二の意義は、この作品における男性の意義がクローズアップされていることである。また、男性のパートナーであり、対の

存在としての女性性が主張される。母子の関係が紡ぐ家系という縦のベクトルでは定義できない、時とともに移ろう、他者との関係の中で、愛情の可能性を信じ、追求する価値があるというメッセージが、この作品によって示唆されている。第三の意義は、著者 Hurston の「個」の主張の表象である。異性との愛情やパートナーとの絆に価値を見出しながら、人間は「個」の尊厳としての孤独を保持しなければならないという Hurston の示唆が、Janie のあり方によって表されるのである。それぞれの意義について章ごとに詳しく考察していきたい。

I

まず、「母」にならない Janie が、自ら直面した人種に起因する問題を後の世代に先送りすることなく、自分の代で解消する必要に迫られる様子を考察していきたい。

Janie の祖母は奴隷制時代の生き証人であり、自分の属する人種とジェンダーの限界を、以下のように痛感して Janie に語る。

... de white man is de ruler of everything as fur as Ah been able tuh find out. May be it's some place way off in de ocean where de black man is in power, but we don't know nothin' but what we see. So de white man throw down de load and tell de nigger man tuh pick it up. He pick it up because he have to, but he don't tote it. He hand it to his womenfolks. De nigger woman is de mule uh de world so fur as Ah can see.
(18)³

Janie の祖母と母はそれぞれ、白人の主人と学校の教師から選択の余地なく妊娠させられ子どもを産んでおり、正式な結婚によって妻という社会的に認知される地位を得ることもない。それゆえ、祖母は孫娘の Janie には、自

分たち母子が手にすることができなかった、結婚手続きを経て得られる妻という社会的地位を手に入れてほしいと切に願うのである。祖母が娘に託した、職業を持つ女性になってほしいという願いはレイプ行為によって踏みにじられた。その後、再び女性という弱者の性を備えて生まれた孫娘には、今度こそ社会的な高みを与え、彼女自身と女性性と民族性に備わる無念を、世代を超えて時間をかけてでも解消したいという執念を伴う祖母の願いが託されるのである。そして、社会的に最も弱者で軽視される立場にある祖母の願いと意見を聞いてくれる相手は、彼女より弱者で庇護される立場である子供時代の Janie をおいてほかにはいない。祖母の、“Ah wanted to preach a great sermon about colored women sittin’ on high, but they wasn’t no pulpit for me.” (20) という言葉は、孫娘に自分の「語り」を受け止めさせようとする強い願望と、社会的地位における上昇志向を表すのである。

Janie は祖母と母が体験した人種差別や黒人観、女性観を、世代を越えて受け止める受け皿であり、祖母の語りの唯一の聞き手となる。祖母の言う正式な結婚による社会的地位が幸福をもたらすという考えに従順に従うことで、Janie は祖母の自己実現を叶え、祖母の代には実現できなかった、正式な妻の座を得るという課題を、祖母に代わって解決していると言える。

しかし祖母とは異なる時代と社会に生きる Janie は、Logan Killicks との結婚後まもなく、結婚が必ずしも愛や幸福をもたらすものではないことに気付く。Janie は祖母によって科せられた生き方の枠組みを打ち破り、「地平線」“horizon” (1) を広げたい欲求にかられ、彼女自身の自己実現のための課題を認識していくのである。Joe Starks との結婚、イートンヴィルでの生活、そして Tea Cake との結婚とエヴァグレースでの生活を通し、Janie は人種や階級、結婚について様々な人々の考えに触れ、経験を積むが、祖母とは違って、自分の人種観や男女観を次世代の親族に伝えたり、彼女が抱える課題の解決を次世代に期待することはできない。Janie が唯一自分の人生観を語る相手は、一般読者の代替である Pheoby という同世代を生き

る友人だけである。彼女は Janie の家系に関わることがない他人であり、Janie が制御したり、自分の「生きなおし」を期待することができる人物ではないのである。

白人の肉体的特徴を受け継いだ Janie の容姿は、さまざまな男性を惹きつけ、時にはエヴァグレーズで出会った Mrs. Turner のように、肌のより白い黒人を社会的階級において上位であると評価するような人物の尊敬の対象となる。しかし奴隷であった祖母を持つ、黒人である Janie の肌の白さは、祖母と母がいずれも「母」となる際に受けたレイプと虐待の結果である。そして彼女らが受けた苦しみの特徴としての Janie の肉体的特徴が、皮肉にも Janie の女性的魅力や人種的ステイタスを生み出しているのである。すると Janie が「母」にならないことの意義の一つは、祖母や母が受けた虐待と不幸の伝統を断ち切り、さらに、新たな人種にまつわるイデオロギーの再生産を回避することではないだろうか。

黒人でありながら色白である Mrs. Turner は、Janie の肌の白さゆえに彼女を気に入り、また Janie が彼女よりも色の黒い夫、Tea Cake に満足していることにいら立つ。Mrs. Turner が同胞であるはずの黒人たちに対して抱く思いは、“Ah can’t stand black niggers. Ah don’t blame de white folks from hatin’ ’em ’cause Ah can’t stand ’em mahself. ’Nother thing, Ah hates tuh see folks lak me and you mixed up wid ’em. Us oughta class off.” (173) と語られ、また、“If it wuzn’t for so many black folks it wouldn’t be no race problem. De white folks would take us in wid dem. De black ones is holdin’ us back.” (174) と述懐される。これらの Mrs. Turner の語りから読み取れることは、彼女が白人に身体的にも階級的にも近づくことを望んでおり、黒人を卑しく忌み嫌うべき存在として認識しているということである。黒人同士でありながら同類とみなされることを避けたいとする心理は、Hurstons の自伝、*Dust Tracks on a Road* (1942) における第Ⅻ章 “My People!

My People!”で回想的に描写される場面において、裕福で教養のある黒人が、粗野で下品な黒人たちに対して抱く思いを彷彿とさせる⁴。このような黒人社会を分断する対立は、資本主義社会であり人種差別が存在する社会にあって、少しでも繁栄と安全を手にしたいたいと考える本能的な欲望であると同時に、黒人社会に浸潤する白人的視点を内在した差別意識と言えよう。

Janie は、Mrs. Turner の人種観と階級意識を聞いてただあきれる。Janie は人種についての偏見や拘泥を持たないからである。このような Janie の困惑ぶりには、作者である Hurston の人種観が大いに重なり合う。Hurston は、同じ *Dust Tracks on a Road* の中で、裕福な黒人と貧困層の黒人との対立を認識していたことを述べてはいるが、彼女自身は「黒人」という概念を悲観的にとらえる意思はない。Hurston はこの気持ちを、“Therefore I saw no curse in being black, nor no extra flavor by being white.” (“Dust Tracks” 731)、さらに、“There is no *The Negro* here. Our lives are so diversified, internal attitudes so varied, appearances and capabilities so different, that there is no possible classification so catholic that it will cover us all, except My people! My people!” (“Dust Tracks” 733) と述べている⁵。また、Alice Walker は、“In her easy self-acceptance, Zora was more like an uncolonized African than she was like her contemporary American blacks, most of whom believed, at least during their formative years, that their blackness was something wrong with them.”

(Hemenway xiii)⁶と論じて、Hurston が黒人種を差別というコンテクストの中だけでとらえるにとどまらない俯瞰的な視点を持つことを指摘している。Hurston はアメリカにおける黒人差別の現実に対する認識と、人種性へのこだわりのなさや黒人であることの誇りを、矛盾しながらも両者を抱えていると考えられ、Janie は Hurston の同人種内での階級対立や差別を否定する一面を体現する人物と言えよう。Mrs. Turner は、黒人性から離れ

たいと願う一方で、白人に迎合する黒人であると彼女が考える Booker T. Washington (1856-1915) のスタンスをも嫌い、“Even if dey don’t take us in wid de whites, dey oughta make us uh class tuh ourselves.” (174) と語る⁷。白人に対しても黒人に対してもアウトサイダーになることを誇りと考える Mrs. Turner の人種観は、白人の支援者を持ち、黒人種という枠組みですべてを説明できないと考える Janie や Hurston の人種観とは対極にあるのである。

II

Janie は三度とも黒人の男性と結婚しているため、もし彼女が出産をするとしても、新たな世代による肉体的特徴の「白人化」は進行することはないと予測できる。しかも Janie は、子供を手段として、黒人性への誇りや白人に対する敵意といった人種的なイデオロギーを示す欲求を持たないゆえに、彼女は「母」となる必要がないのである。祖母の強いイデオロギー伝達欲にも影響されず、Janie は黒人であることに対する強い劣等感のもとより、白人に対する被害意識を持たず、肌の白さによる白人優位的な階級意識も持たない。それゆえ、子供の肌の色合いによって Janie の人種に関するイデオロギーが吐露される必要がないのである。

この物語全体は、Janie が祖母の物語や母の身に起こった出来事、そして自らの半生を友人の Pheoby に「語る」という構造をとる。「語る」という行為の描写に注目すると、Janie の二番目の夫である Jody は演説が上手く、それによって名声を得るが、妻の Janie が人前でスピーチをすることを快く思わない。そして Jody にスピーチの機会を奪われた際、Janie は寂莫とした気持ちになる。Hurston 文学におけるもう一人の「演説者」は、Hurston の父がモデルとされる *Jonah’s Gourd Vine* (1934) の John である。John もまた演説のうまさで自らの社会的地位と名声を手に入れる点において、Jody を彷彿とさせる。彼らの演説の効果によって、「語る」ことは権威の取

得を意味することが読み取れる。Jody がイートンヴィルの町長に就任した際には Janie はスピーチを封じられ、不本意な思いをするが、酷使されている騾馬を Jody が「休ませるために」買い取った際には、Janie は思わず、
“Jody, dat wuz uh mighty fine thing fuh you tuh do Abraham Lincoln, he had de whole United States tuh rule so he freed de Negroes. You got uh town so you freed uh mule. You have tuh have power tuh free things and dat makes you lak uh king uh something.” (69-70) と演説し、周囲の人々の賞賛を受ける。この時、自分の妻が演説に成功し、一つの名声を得たことを Jody は面白く思わない。一方で、彼らのコミュニティの人々は、「騾馬を自由にする」という行為に対し、Janie が恣意的に与えた意味を一つの権威ある「現実」として承認したのである。この場面においても、「演説」が他者の共感を呼び、成功した場合、語り手は一つの「現実」の能動的な構築者であり支配者となることが読み取れる。これにより Janie は夫に従属することなく、自らが構築した現実を権威を持って支配する経験をする。さらに彼女は、三番目の夫である Tea Cake が狂犬病の末、錯乱した際には、自己防衛のために彼を銃で撃つてしまい、法廷でそのことを自らの生をつかみとるために証言する必要に迫られる。彼女は無実を勝ち取るが、彼女の語りの内容次第では陪審員から誤解される可能性もある中、彼女はやはり一つの「現実」の構築に成功しているのである。最後には、この話全体が Janie の「語り」であることが示唆される。法廷の場面と同様に、Janie 自ら語らなければ、この話をさらなる「母」の物語というメタフィクションとして再構築し、語ってくれる子供の世代はいないのである。Janie は「母」にならないことによって、自ら語り、一つの現実の構築者となる。そのような Janie の生き方の中に、Hurston の、黒人女性の自意識を推進する意図が読み取れると言える。

III

また、Janie は「母」にならないがゆえに一層、この作品における男性の意味がクローズアップされると考えられる。娘や孫娘に自己実現の夢を託した祖母とは異なり、Janie には子供を自己実現の一形態とすることは不可能であり、彼女は常にパートナーとなる男性に理解され、自分の価値を承認されることを求め続けていく。彼女にとって夫や恋人となる男性は自分のアイデンティティーの保証人であってほしい存在である。Janie は幻滅を繰り返しながらもこの価値観を変えることはなく、彼女の半生は新たな男性との相互理解を求めて動く旅とも考えられる。彼女の求める男性は、子供の父としての役割を担う男性ではなく、因習的な結婚制度における「妻」を自分の下位に従える「夫」でもない。彼女が追求するのは、自分を認め高めてくれる対等なパートナーであり、また対の存在としての自らの女性性を逆照射してくれる「他者」なのだ。もはや心の通わなくなった Jody を亡くした際の Janie の気持ちは、“... she found that she had no interest in that seldom-seen mother at all. She hated her grandmother and had hidden it from herself all these years under a cloak of pity. She had been getting ready for her great journey to the horizons in search of people...” (108) と描かれる。この描写から読み取れることは、Janie は家族における世代間のつながりやルーツに心のよりどころを見つけようとする欲求は全く持たないということである。彼女は、異性であり、他者である未知の人間の中に、さらに限られた自らと共感し合える性質を認め、承認されることを追求する。Janie は「他者」の中で生きることへの耐性が強く、どこまでもパイオニア的な精神を持ち続けるのである⁸。

Janie の恋愛に対する期待は、それらが結婚という結果をとるゆえに次々と裏切られていく。Janie が求めるものは自分の可能性を広げてくれるヘテロセクシュアルなパートナーと心を通わせることであり、因習的な結婚制度

における「妻」の役割ではないが、彼女の夫たちは結局この役割を Janie に求めるゆえに彼女が次々と夫を変えることは不可避なのである。まず結婚前の16歳の Janie の結婚観は、“She saw a dust-bearing bee sink into the sanctum of a bloom; the thousand sister-calyxes arch to meet the love embrace and the ecstatic shiver of the tree from root to tiniest branch creaming in every blossom and frothing with delight. So this was a marriage!” (14) と描かれ、結婚を甘美でセンシュアルな喜びそのものとしてとらえていることが読み取れる。しかし Logan Killicks との結婚後まもなく、“She knew now that marriage did not make love.” (30) と描かれるように、Janie は学びを得て、祖母の価値観からは巣立っていくのである。次に Janie が自分に新たな「地平線」を与えてくれ、自分の可能性を広げてくれると考えた Jody は、結局は彼女を服従させようと暴力をふるう夫となるのだが、彼の病死後も、Janie はなおも新たな人々と出会いたい気持ちをたぎらせる。この様子は、“... it was important to all the world that she should find them and they [people] find her.” (108) と描かれ、Janie が男女間の愛情の可能性に対して、決して絶望していないことが分かる。しかし、Janie が最も愛情を傾け、死後もその愛を感じたと思う Tea Cake さえも、夫であった時には、Janie に対する所有欲から彼女の言動が気に入らないと彼女を叩いたのである。そしてこのような男女間の愛の経過を経験したのちも、Janie はヘテロセクシュアルなパートナーとの出会いがもたらす幸福の可能性に対して悲観的になることはない⁹。ここで Hurston 自身の恋愛観を探ってみると、彼女はある時点で「愛」について次のように述べている。

I was sincere for the moment in which I said the things.... It was true for the moment, but the next day or the next week, is not that moment. No two moments are any more alike than

tow snowflakes.... Each moment has its own task and capacity, and doesn't melt down like snow and form again. It keeps its character forever. ("Dust Tracks" 752)

上記の文章からは、Hurston にとって、他者であるパートナーのあり方や自分にとってのパートナーとの関係の可能性が、限られた人生の時間では決して定義できない、まさに広がり続ける「地平線」であることがうかがえる。一方、Janie が Pheoby に語る愛の定義は以下のように描かれる。

Then you must tell 'em dat love ain't somethin' lak uh grindstone dat's de same thing everywhere and do de same thing tuh everything it touch. Love is lak de sea. It's uh movin' thing, but still and all, it takes its shape from de shore it meets, and it's different with every shore. (235)

Janie がとらえる「愛」とは海岸線の形によって姿を変え続ける海である。Hurston が抱いた「愛」の概念は Janie のそれに強く投影されていると言え、何度理想を挫かれても他者と異性への信頼を失うことのない Hurston の人生経験に対する肯定的な態度がうかがえる。Janie は母子という歴史を伝承させる家系における縦のベクトルではなく、男女という他者性と同時代性という横の広がりの中で自らの「語り」を披露し、Hurston に代わって諦めることなく他者との相互理解の可能性を追求するのである。

IV

さらに Janie は「母」にも因習的な「妻」にもならないことによって「個」であり得る。Pheoby に自らの半生を語る Janie は、その語りによって他者を支配しようとするわけでもなければ、女性性や民族性と結びつく問題を定

義しようとしているわけでもなく、Kaplan の “Janie’s view of voice seems private and personal, even privatistic.” (Kaplan 126) という指摘からも示唆されるように、あくまでも Janie 個人の人生における充実感を伝えたいゆえに語るのである。そして Janie の生き方には、Hurston が考える「個」としての人間の尊厳についての主張が投影されている。Janie は親族のつながりとルーツを失い、自分の遺伝子を受け継ぎ自分の人生を記憶し語り継いでくれる子孫を持たず、他人の中で共感しあえる相手や新たな経験を求める。また Janie は民族性へのこだわりからも切り離されており、白人性や黒人性というコンテキストの中で自分のアイデンティティーを探求することなく、一個人としての自由な感性と意志を持ち続ける¹⁰。狂犬病にかかり、死の間際に錯乱して Janie を撃とうとする Tea Cake と同じく銃を持つ Janie が対峙する場面では、Janie は相手か自分のどちらかの生の選択に否応なく迫られ、自らの生を選ぶ。この場面において、Janie の Tea Cake への愛は変わることはないが、それを凌駕してでも守らなければならない「個」としての人間の尊厳や価値が示唆されていると言えよう。

常にパートナーとしての異性を求め続けながら、相手からの影響に左右されない「個」であり続けたいという Hurston の、あるいは人間の持つ普遍的で矛盾した欲求が Janie の生き方によって主張されている。Hurston は自分の経験と Janie の人生との関係を、“The plot was far from the circumstances, but I tried to embalm all the tenderness of my passion for him (A.W.P) in *Their Eyes Were Watching God*.” (“Dust Tracks” 750) と述べている。Hurston のこの記述により、A.W.P と記された当時のパートナーと愛情を分かち合うことを欲する気持ちと、「個」であることの尊厳の追求という両立が難しい欲求から生まれる彼女自身の逡巡が Janie の人生に投影されているようだ。物語の結末部分において Janie は、
“Two things everybody’s got tuh do fuh theyselves. They got tuh go tuh God, and they got tuh find out about livin’ fuh

themselves.” (235) と語り、人間は「個」であることから逃れられないことを主張するが、パートナーとの愛を否定することはない。彼女の「個」と「生」の権利を自ら語った法廷での場面を回想する際にも、Janie は Tea Cake がそばにいるように感じ、“Of course he wasn’t dead. He could never be dead until she herself had finished feeling and thinking. The kiss of his memory made pictures of love and light against the wall. Here was peace.” (236) と思う。しかし、その Tea Cake は肉体的には存在しない、Janie の心が望ましいと感じた幻影であり、あくまでも Janie の「個」としての人生の可能性を広げ、彩を添える副次的な存在なのである。

ハリケーンに襲われて家の中で息をひそめる Janie と Tea Cake、そして Motor Boat が、嵐の様子や自分たちの安全と運命を案じる様子は、“They seemed to be staring at the dark, but their eyes were watching God.” (196) と描かれる。ここにおいても、神にただ見られるのではなく、人間のほうが神という言葉に象徴される不可抗力たる運命の動向を読み取ろうとし、自ら判断していかなければいけないということ、つまり、その判断を下す「個」の尊厳が示されていることが読み取れるのである。

結び

かくして Janie はヴードゥーの女神 Erzulie 同様、性愛や異性のパートナーとの絆を追求するが、「母」にはならない。Derek Collins もまた、“... the love goddess Ezili Freda, unmistakably parallels Janie with regard to her physical beauty, her barrenness, her focus on erotic love, and the lack of permanence in her relationships with men.” (Collins 52) と指摘し、Janie の豊かな女性性と性愛への貪欲さを Erzulie の表象によって説明している。Erzulie に根差す Janie の人生は、愛を求める気持ちに率直に行動し、自らの信じる価値観を主張し、貫いていくものであることが予

測できる。

また、Lara Antal は、“... Hurston did not want her work to represent the entire black race but to be seen as an expression of her own unique vision.” (Antal 32) と述べ、Hurston が同時代のハーレム・ルネサンスに関与しつつも、人権運動のプロパガンダ的作品を描こうとしているわけではない点を指摘する。同時代の世間で取りざたされる人種観、女性観にとらわれずに、自分が生きたいように生きる Janie が、ヴァドゥーの女神をプロトタイプとする人物であることが示唆的に描かれることで、黒人のルーツとなるアフリカの民族性の主張とそれを誇りととらえる Hurston の意志が読み取れるのである。

Lara Antal が、“She was a natural storyteller” (Antal 7) と評する Hurston と同様に、Janie は自らの人生を「語る」意志を持つ。Janie は自らの人生を自分の視点で解釈し、子世代に再解釈されることのない「閉じられた」ストーリーの創出者となるのである。幻滅を繰り返しながらもおも男女間の愛に生きがいと可能性を追求する Janie の生き方には、Hurston のそれが重なるとともに、ヴァドゥーの女神のエネルギッシュな血を引く黒人女性のたくましさが主張されていると言えよう。作品冒頭部の、“... his dreams mocked to death by Time. That is the life of me. Now, women forget all those things they don't want to remember, and remember everything they don't want to forget. The dream is the truth.” (1) と描かれる男女観は、男性と対照的な女性のたくましさとその「現実」創作能力を示唆しているのである。

さらに、血縁からも民族性からも、時には男女の絆からも独立した、「現実」を制御できる「個」の尊厳と自由を守ることの価値を、「母」にならない Janie の半生は物語っているのである。

※本稿は、日本英文学会第92回全国大会（ウェブカンファレンス）において

発表した内容に大幅な加筆修正を加えたものである。

註

- 1 例えば Derek Collins は、“The characterization of Janie Crawford ... resembles to a significant degree the Haitian goddess Ezili Freda...” (Collins 52) と指摘している。また、Pamela Glenn Menke は、この作品が ヴードゥー神話のコンテキストにおける神話学的解釈の可能性に富むことを、“As its title suggests, it is a book filled with god signs awaiting interpretation.” (Menke 110) と述べる。
- 2 Eva Lennox Birch もまた、“It is true that her [Janie’s] growth is at the expense of men.” (Birch 80) と指摘するが、Janie やひいては Hurston がヘテロセクシュアルな愛を完全に信じていないわけではないという曖昧性さについても述べている。本稿でも、Hurston の異性間の愛情に対する逡巡がこの作品において描き出されていることを指摘した。
- 3 Zora Neale Hurston. *Their Eyes Were Watching God*. New York: HarperCollins Publishers, 2010. 18. 以下、本書からの引用はすべてこの版に依り、カッコ内にページ数を記す。
- 4 *Dust Tracks on a Road* のなかで Hurston は、“So I sensed early, that the Negro race was not one band of heavenly love. There was stress and strain inside as well as out. Being black was not enough. It took more than a community of skin color to make your love come down on you. That was the beginning of my peace.” (“Dust Tracks” 731) と述べ、黒人集団内の階級分断によるいがみ合いの現実を指摘している。
- 5 さらに Hurston はエッセイ “How It Feels to Be Colored Me” の中で、“But I am not tragically colored. There is no great sorrow dammed up in my soul, nor lurking behind my eyes. I do not mind at all. I do not belong to the sobbing school of Negrohood who hold that nature somehow has given them a lowdown dirty deal and whose feelings are all hurt about it.” (*How It Feels to Be Colored Me* 148) と記し、自らの人種性ゆえの不自由を感じていないことを繰り返し述べている。
- 6 Hemenway の著作に付された Alice Walker (1944-) による Foreword より引用。
- 7 Hurston はその著書においてたびたび Booker T. Washington (1856-1915) と W. E. B. Du Bois (1868-1963) について言及している。Booker T. Washington

は白人に従順であることや、実際に役立つ技術を身に付けて労働することを黒人社会に勧めため、白人寄りの活動家であるとみられることがあった。

- 8 Eva Lennox Birch は、“In Janie’s constant willingness to look forward, Hurston celebrates the female will to survive” (Birch 73) と論じており、人生経験に対して常に前向きで、幻滅に負けるこのない Janie の生命力を指摘している。また Edward M. Pavilić は、本作品や Hurston の作品における “diasporic energies” (Pavilić 121) を指摘し、論じている。
- 9 Sato Hiroko は、Janie がたくましく自らの幸福を追求する様子を、“Happiness is a subjective thing. Janie believed that she had experience happiness, and that was it. This novel is not a novel of defeat or resignation. It is a story of a woman who really lived and accepted her fate.” (Sato 70) と述べ、この作品が表す、人生経験への積極性を評価している。
- 10 Emily Dalgarno は、“Janie’s goal is to free herself from a history and a culture based on the envy of property.” (Dalgarno 533) と論じており、本稿における Janie が「個」として生きる尊厳を守ろうとしているという解釈と共通している。

引用文献

- Antal, Lara. *Zora Neale Hurston*. New York: Cavendish Square, 2017.
- Birch, Eva Lennox. *Black American Women’s Writing: A Quilt of Many Colours*. London and New York: Routledge, 2014.
- Collins, Derek. “The Myth and Ritual of Ezili Freda in Hurston’s *Their Eyes Were Watching God*.” *Zora Neale Hurston, Haiti, and Their Eyes Were Watching God*. Ed. La Vinia Delois Jennings. Illinois: Northwestern University Press, 2013.
- Dalgarno, Emily. “‘Word Walking without Masters’: Ethnography and the Creative Process in *Their Eyes Were Watching God*.” *American Literature* 64.3 (1992): 519-41.
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A literary Biography*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1980.
- Hurston, Zora Neale. *Their Eyes Were Watching God*. New York: HarperCollins Publishers, 2010.
- , “Dust Tracks on a Road.” In *Zora Neale Hurston: Folklore, Memoirs, and Other Writings*. Ed. Cheryl A. Wall. New York: The Library of America, 1995.

- , "How It Feels to Be Colored Me." *I Love Myself When I am Laughing...* Ed. Alice Walker. New York: Feminist Press, 2020.
- , *Jonah's Gourd Vine*. New York: Harper Perennial, 1990.
- Kaplan, Carla. "The Erotics of Talk: 'That Oldest Human Longin' in Their Eyes Were Watching God" *American Literature* 67.1 (1995): 115-42.
- Menke, Pamela Glenn. "'Black Cat Bone and Snake Wisdom' New Orleanian Hoodoo, Haitian Voodoo, and Rereading Hurston's *Their Eyes Were Watching God*." *Zora Neale Hurston, Haiti, and Their Eyes Were Watching God*. Ed. La Vinia Delois Jennings. Illinois: Northwestern University Press, 2013.
- Pavilić, Edward M. "'Papa Legba, Ouvrier Barriere Por Moi Passer' Esu in *Their Eyes* and Zora Neale Hurston's Diasporic Modernism." *Zora Neale Hurston, Haiti, and Their Eyes Were Watching God*. Ed. Lavinia Delois Jennings. Illinois: Northwestern University Press, 2013.
- Sato, Hiroko. "MY PEOPLE! MY PEOPLE! — A Study of Zora Neale Hurston —" 『英米文学評論』 20 (1) (1972) : 45-48.